

## 心電図検査における前回波形参照の有用性についての検討

心電図検査室<sup>1</sup>, 循環器内科<sup>2</sup>

○藤岡由華<sup>1</sup>, 山田辰一<sup>1</sup>, 中山敏子<sup>1</sup>, 長濱薫<sup>1</sup>,  
小村智子<sup>1</sup>, 小島幸子<sup>1</sup>, 清水優里<sup>1</sup>, 市川篤<sup>1</sup>,  
小原義宏<sup>1</sup>, 立田顕久<sup>1</sup>, 佐藤良夫<sup>1</sup>, 萩原誠久<sup>2</sup>,  
笠貫宏<sup>2</sup>

【目的】心電図波形は本来高い再現性を示すと考えられるが、病態変化や生理的および技術的な理由で波形に変化をきたすことがある。当院での心電図検査は、検査履歴のあるものに対しては前回心電図と比較し、波形変化を伴い臨床上重要と考えられる場合には医師に報告するなど、状況に応じて様々な対応をとっている。

今回、前回心電図と比較し波形参照の有用性を検討したので報告する。

【対象および方法】2007年11月1日～30日の間に総合外来センター検査室で心電図検査を施行した連続5,610例のうち、前回心電図を有する4,659例を対象とした。心電図変化は前回波形と比較し①調律変化群、②QRS変化群：±3mm以上の変化、③ST変化群：±0.5mm以上の変化、④T波変化群：四肢誘導で±1mm以上、胸部誘導で±2mm以上の変化に分類し検出率を検討した。

【結果】心電図変化は4,659例中3,102例(66.6%)に認められた。内訳はQRS変化群：2,586例(55.5%)、ST変化群：237例(5.1%)、内129例(2.8%)にST低下を認めた。T波変化群：2,121例(45.5%)、内186例(4.2%)に陰性化を認めた。また、調律変化は182例(3.9%)（一部QRS波やT波の変化と重複する）を認めた。医師に報告したものは8例(0.2%)であった。

【結語】前回波形と比較を行った結果、66.6%の症例で波形に変化を認めた。QRS変化群は、呼吸の影響や胸部誘導の電極装着部位の違いによる、生理的および検査の技術的精度によるものが原因の多くと考えられた。しかし、T波の陰性化やSTの低下など一部臨床上重要と考えられる変化も含まれていたことから、本来の目的である病態変化の検出に有用であるとともに、検査時の電極位置確認など検査精度の向上にも有用と考えられた。

## 腹痛における腹部超音波検査の役割

腹部超音波検査室<sup>1</sup>, 消化器内科<sup>2</sup>

○荻島綾美<sup>1</sup>, 竹内真弓<sup>1</sup>, 恩田享寛<sup>1</sup>, 曾我祐子<sup>1</sup>,  
寺崎和代<sup>1</sup>, 川手香織<sup>1</sup>, 瀬谷哲子<sup>1</sup>, 柴崎啓子<sup>1</sup>,  
小室美穂<sup>1</sup>, 的場由佳子<sup>1</sup>, 木下詩絵<sup>1</sup>, 中西敏己<sup>1</sup>,  
及川悦雄<sup>1</sup>, 斉藤明子<sup>2</sup>

【目的】腹痛精査は超音波検査(US)依頼理由として比較的よく遭遇する。現在、他に多くの優れた画像診断がある中、腹痛におけるUSの役割と意義について考えた。

【方法】2007年10月に腹痛精査として依頼された228例について、①USのみ、②US+内視鏡、③US+X線、④US+CT、⑤US+MRIの群に検査施行別に分類し、これらを診療科、痛みの部位、US結果と対比させ、臨床側の画像診断使い分けについて検討した。

【結果】USで病変所見のあった症例は171例で、この内、腹痛の原因となり得た症例は65例(胆嚢:24例、腸管:16例、泌尿器:9例等)であった。また、ope施行は9例であり、その後の確定診断とUS結果一致症例は8例(胆嚢炎3例、虫垂炎2例、他3例)であった。検査施行分類は①群55例(24%)、②群54例(24%)、③群58例(24%)、④群9例(4%)、⑤群4例(2%)であった。痛みの部位は②群で心窩部、③群で下腹部から側腹部に多い傾向があった。

【考察】ope施行例の胆嚢炎や虫垂炎は既知の如くUSで病変部位のみならず炎症の波及を観察でき、ope適応判断に有用と思われる。①群では35例が腹痛所見を得ず経過観察となり、整形外科や皮膚科等他科への推奨症例もあった事から、USは被爆もなく非侵襲的に病態把握ができる為、スクリーニングとして検査し、腹部の器質的異常の否定に用いたと予想される。②群は91%が消化器科依頼で70%が内視鏡歴がある事から、原疾患のfollowを兼ねての依頼と思われ、転移や浸潤、腹水等の検索も期待されていると思われる。③群はUSにおけるリアルタイムな腸蠕動の評価やX線だけでは診断できない他臓器の病変検索依頼と思われた。

【結語】腹痛において、USは病変部位検索、腹部の器質的異常の否定、原疾患のfollow、ope適応や治療方針の決定など、その役割は多岐に渡っている。それゆえ迅速な検査が要求されるも、主訴の部位だけでなく広範囲の観察が必要であると考えられた。